

予防につながる傷害情報の収集に関する検討

分担研究者 山中 龍宏（緑園こどもクリニック）

小児の事故による傷害を予防するためには、傷害の原因を究明する必要がある。原因がはっきりしなければ科学的な予防法を考えることはできない。以前から、重症度が高い傷害が受診する医療現場において、どのような情報収集が可能かについていろいろと検討してきたが、今回は携帯電話に付属しているカメラ機能を用いて、傷害の発生に関わった製品、製品が置かれていた環境などの情報を映像として送ってもらうことを試みた。その結果、写真による情報収集は、1) 傷害を起こした製品の特定が容易になり、2) 製品が置かれていた環境、使われていた状況がわかるようになり、3) 傷害をもたらした製品の部位、その機序もはっきりわかり、4) 傷害発生のアニメーションをコンピューター・グラフィックスで作成する場合、正確さが高まり容易に映像化することができるようになった。情報収集にあたって、時間や場所の制約が少なく、保護者の協力も得やすいことがわかった。傷害情報の収集方法として、写メール機能を利用することはたいへん有効な方法と考えた。

A. 研究目的

1960年以降、0歳をのぞいた小児の死因の第1位は「不慮の事故」となっており、小児の健康問題として傷害は大きな位置を占めている。

「健やか親子21」では、事故による傷害についての指標が上げられているが、それらの指標によって予防効果を判定することはむずかしい。予防を考えるためには、傷害の詳しい発生状況、製品などの情報が不可欠である。今回、具体的な事例に対し、新しい情報収集の方法を試みた。

現在まで、傷害に関しては実態報告が中心であり、その情報量の少なさから具体的に予防を考えることはほとんど不可能であった。個別の事例についての予防法の検討は、国民生活センター、製品評価技術基盤機構（NITE）、製品安全協会、また各企業などで行われてきたが、事故全体からみると、微々たる件数にしかすぎ

ない。

医療現場には、日々、膨大な数の事故による傷害例が受診しているが、それらの傷害例を事故の予防に結びつけることはたいへんむずかしい。

今回、携帯電話に付属しているカメラ機能を用いて、傷害の発生に関わった製品、製品が置かれていた環境などの情報を映像として送ってもらうことを試みた。

B. 研究方法

事故による傷害のために緑園こどもクリニックを受診した小児について検討した。

写メールを受け取るためのアドレスを設定した。保護者の話だけからは、製品や環境がよくわからない事例について、携帯電話のカメラで製品や環境を撮影してもらい、写メールで送ってもらうよう保護者に依頼した。

また、医療機関を受診した保護者に対し、な

ぜ詳しい情報を聞くことが必要なのかを理解してもらうための保護者向けのリーフレットの文案を作成した。

(倫理面への配慮)

診療に必要な情報として収集したものを検討に用いたので、とくに保護者からの同意は得ていない。携帯電話の写メールによる映像の送付については、保護者に利用法を説明して了解を得た。

C. 研究結果

i) 携帯電話の写メールによる情報提供

傷害のために受診した症例の概要と送られてきた写真を以下に示した。

【症 例 1】 2 歳 8 ヶ月 男児 ID 9656

平成 19 年 12 月 6 日午後 1 時ころ、自宅の浴室の洗濯機の下に指を突っ込んだ。ひっぱり出したとき、皮がむけ、少量出血し、午後 2 時 25 分に当クリニックを受診した。右第 2 指先端部の手掌側に切創、手背側に擦過傷を認めた。生理食塩水で洗浄後、抗菌薬の軟膏を塗布した。

【詳しい状況の聴取】

母親に発生状況を聞くと、今日、初めて穴を発見し、「穴だ、穴だ」と午前中に騒いでいた。「取れない！」と叫んでいるので行って見ると、指が抜けなくなっていた。母親はそばにいなかった。来院時、健側である左第 2 指の受傷部位の直径は 10 mm であった。

【携帯電話による情報収集】

母親からの話だけでは、「洗濯機の下」と聞いてもどこの穴か、なぜ穴が開いているのかわからなかった。そこで、傷害が発生した洗濯機の全体像、穴のある局所、洗濯機のメーカーと型式番号を携帯電話のカメラで撮影してもらい、それを送ってもらった(図 1)。送られて

きた 4 枚の画像により、どこで傷害が発生したかを明確に知ることができた。

【症 例 2】 5 歳 2 ヶ月 女児 ID 7189

平成 20 年 1 月 20 日午後 3 時ころ、自宅の居間でチョコポットを運ぼうとして下に落とし、足の指にぶつけた。出血したが、日曜日であったため、1 月 21 日午前 10 時過ぎに当クリニックを受診した。左足第 5 指先端の爪床の内出血、爪の内側に擦過傷を認めた。来院時も出血していた。生理食塩水で洗浄後、抗菌薬の軟膏を塗布した。

【詳しい状況の聴取】

母親に状況を聞くと、チョコポットは重く、底部はとがっているとのことであった。チョコポットの図(図 2 の左)を描いてもらったが、よくわからなかった。

【携帯電話による情報収集】

そこで写メールで製品の映像を送ってもらうよう依頼した。依頼して 30 分後には映像が送られてきた(図 2 の右)。

これは B 社が 2007 年 11 月 22 日から発売している製品(高さ 120 mm × 幅 110 mm × 奥行 95 mm)で、小学校低学年の女児を対象としている。オリジナルのチョコレートの形ができ、電池式で値段は 3465 円である。ハッピーキッチンシリーズの一つで、バレンタインデーを目前にした時期に傷害が発生した。

この製品の問題点は、「重量がある」ことのようなのである。母親も「重い」と言っていた。傷をみると、かなり強い力がかかったように思われた。製品の外形は比較的小さく、幼児でも簡単に運ぶことができる大きさである。容器は上下に分かれており、そのため落下しやすい可能性がある。容器が重いと、足に傷害をきたす可能性が高い。

ii) 保護者向けのリーフレット

詳しい情報を収集する必要性を訴えるリーフレットの文案を作成した。これをもとに、保護者が理解しやすい文章に改変し、イラストも入れて作製し、医療機関の外来に置くことを考えている（表）。

D. 考 察

今まで、医療機関を受診した比較的重症度が高い傷害について、予防に結びつく情報とはどのようなものかについて検討してきた。

今回示した症例1は幼児の指はさみ事故の典型例である。指を入れることができる隙間があると子どもは指を入れてしまうことはよく知られている。症例2は「子どもの生活環境に新しい製品が出回ると、必ず新しい傷害が発生する」という法則の典型例である。

これまで医療機関の外来で、詳細な問診をとり、傷害の発生状況の模式図を描いてもらう（1）などを試みてきたが、今回、携帯電話のカメラによる映像収集を試みた。現在、日本では携帯電話の普及率は国民一人にほぼ1台となっており、携帯電話のほとんどはカメラ機能を有している。子どもを持つ保護者のほとんどは携帯電話を持っているので、このような情報収集が可能となった。

この方法で情報を収集すると、場所や時間の制約がほとんどないので情報提供を依頼しやすい。映像を送ってもらうことにより、1) 傷害を起こした製品の特定が容易になった、2) 製品が置かれていた環境、使われていた状況がわかるようになった、3) 傷害をもたらした製品の部位、その機序ははっきりわかるようになった、4) 傷害発生アニメーションをコンピューター・グラフィックスで作成する場合、正確さが高まり容易に映像化できるようになった、5) 傷害の再現実験をすることが可能にな

った、などが利点として挙げられる。一部の映像は、製品のメーカーに直接伝えることもでき、具体的な予防策を検討することが容易になった。外来での診療時に依頼すると、30分後には映像が送られてきた場合もあり、迅速に情報を収集することが可能となった。

傷害情報の収集法の一つとして、写メールによる情報収集は有用な方法であることがわかった。

昨年度の研究で、模式図を描いてもらうことにより、事故の発生状況を理解することが容易となった（1）。しかし、細かい情報を得ることはできなかった。写メールであれば、住宅内であれ、屋外であれ、傷害を受けた場所、構造物、製品の写真を撮って送ることは容易であると思われる。医療機関を受診した重症度が高い傷害について、外来において予防につながるような情報を収集し、不足している情報については写メールで映像を送ってもらえば極めて精度が高い情報となることがわかった。これらの情報を、工学系の専門家に提供すれば、傷害予防に直結させることができると考えた。

E. 結 論

事故による傷害を予防するためには、事故の発生状況を詳しく聴取し、いろいろな面から検討する必要がある。医療現場には重症度が高い傷害が日々、受診しているが、処置のみが行われ、事故の発生状況を詳しく聴取することは行われていない。しかし、医療現場は事故の発生時間、発生現場に近い場所にあり、当事者の記憶も新しいので、事故の詳しい発生状況を入手しやすい環境にある。

現在まで、医療機関で収集された事故の情報からコンピューター・グラフィックス上で事故を再現することは難しかったが、今回、写メールの映像情報を得ることにより、事故の発生状

況を理解することが容易となり、コンピューター・グラフィックスで画像化する場合にもたいへん有用であることがわかった。今後は、写メールの映像を併用しながら、事故の発生状況のデータを蓄積していく必要があると考えた。

文 献

1) 山中龍宏：小児の事故による傷害の情報内容に関する検討。平成 18 年度厚生労働科学研究子ども家庭総合研究事業「健やか親子 21 の推進のための情報システム構築および各種情報の利活用に関する研究」平成 18 年度総括・分担研究報告書、pp306-309, 2007 年 3 月

F. 研究発表

1. 論文発表

1) 本村陽一、西田佳史、山中龍宏、北村光司、金子 彩、柴田康徳、溝口 博：知識循環型事故サーベイランスシステム。統計数理 54:299-314, 2006

2) 山中龍宏：Injury prevention（傷害予防）

に取り組む ―小児科医は何をすればよいのか―。小児内科 39:1006-1015, 2007

- 3) 西田佳史、本村陽一、山中龍宏：子どもの傷害予防へのアプローチ ―安全知識循環型社会の構築に向けて―。小児内科 39:1016-1023, 2007
- 4) 山中龍宏、掛札逸美：WHO：子どもの事故による傷害予防 10 か年計画。小児内科 39:1035-1040, 2007
- 5) 山中龍宏：思春期の事故による傷害。小児内科 39:1328-1334, 2007
- 6) 山中龍宏：乳幼児の誤飲を予防する。社会薬学 26:39-48, 2007
- 7) 山中龍宏：子どもの事故による傷害は予防できる。日小医会報 No. 34:93-97, 2007
- 8) 西田佳史、本村陽一、山中龍宏、北村光司、溝口 博：安心・安全社会構築のための日常行動センシングとモデリングの基盤技術。日本ロボット学会誌 25:690-698, 2007
- 9) 山中龍宏：小児の誤飲・急性中毒。救急・集中治療 19:493-499, 2007

表 傷害の情報を提供していただくときの保護者向け依頼リーフレット案

「あなたのお子さんが今回、受診されたけが（傷害）について教えてください」

子どもたちは毎日、成長・発達しています。昨日できなかったことが、今日できるようになり、興味も広がります。それにともなって、事故が起こり、けが（傷害）を負ってしまうのです。

あるデータによると、生まれてから3歳になるまでのあいだに、10人のうち7～8人の子どもがけが（傷害）のために医療機関を受診しています。けが（傷害）は「めったに起こらないこと」では決してないのです。なかには、けが（傷害）によって命を落とすお子さんもいます。後遺症のため、生涯にわたって不自由な生活を強いられるお子さんもいます。

同じ事故を繰り返さないために

皆さんもご存じのとおり、同じような事故が毎日のように起こり、そのたびに「あぶないとわかっていて、どうして防げなかったのか」と言われます。でも、あぶないとわかっているだけでは、事故は防げません。同じ事故を繰り返さないためには、事故が起こった状況やけが（傷害）の原因となった製品などの詳しい情報を集め、対策を立てることが不可欠です。

しかし、子どものけが（傷害）の場合は、「おとなが不注意だった」と保護者の95%は考えているようです。保護者は「自分が悪かった」と後悔するだけで終わり、重要な情報はどこにも伝えられません。けが（傷害）の原因は明らかにされず、したがって予防策もとられず、結果として同じ事故が起こり続けているのです。

あなたのお子さんが医療機関を受診するほどのけがをしたら、その情報を知らせてください。「何が起こったのか、私はよく見ていなかったけど」とお思いでもかまいません。どんなモノでどんな程度のけがが起きたのか、教えてください。「私が悪かったのだ」とあなたが後悔するだけでは、子どものけが（傷害）は予防できません。あなたからの情報が、あなたのお子さんの命を守り、日本の多くのお子さんたちの命を守るのです。

けが（傷害）のデータは、国民の財産、人類の財産です。けが（傷害）のくわしいデータが予防の出発点なのです。そして、子どもに安全を提供することは私たちおとなの義務なのです。

図1 携帯電話のカメラで撮影して送られてきた写真（症例1）

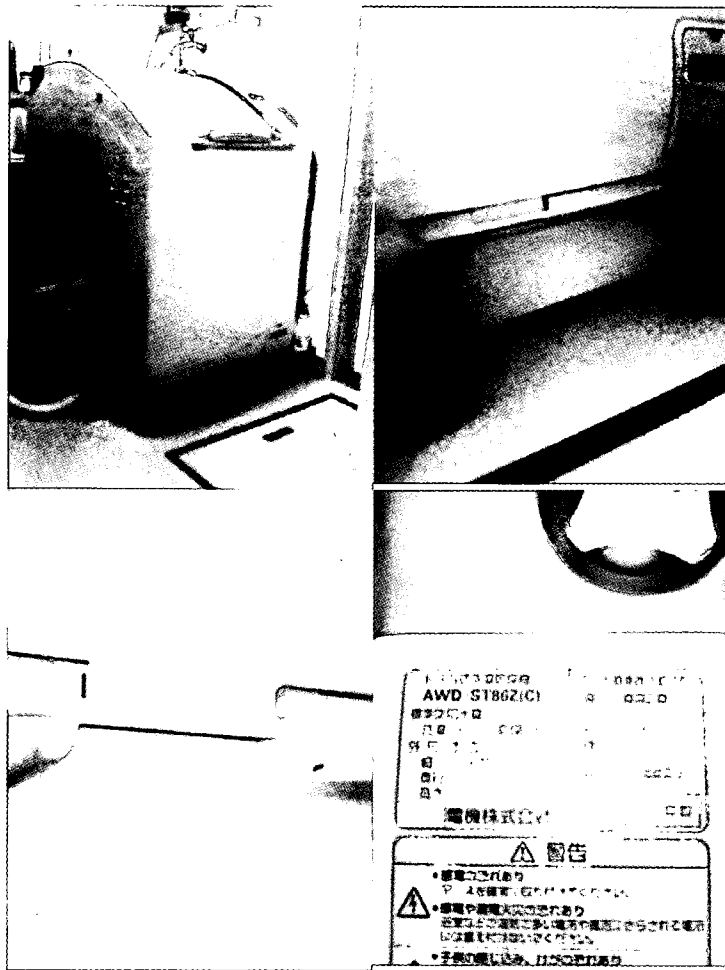
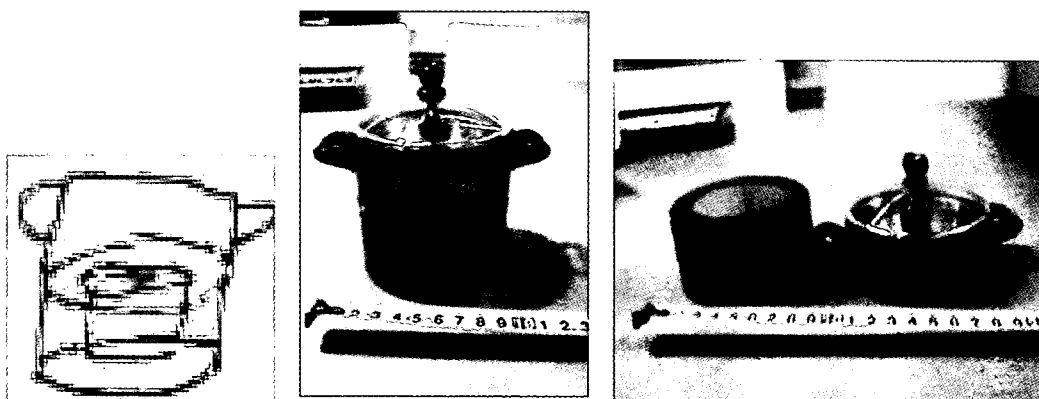


図2 左の絵は受診時に母が描いたもの。
右の写真は携帯電話のカメラで撮影して送られてきた写真（症例2）



健やか親子21中間評価からみえる各種検討課題に関する研究

松浦 賢長

福岡県立大学看護学部

山縣然太朗

山梨大学大学院医学工学総合研究部

本分担班では、健やか親子21中間評価によって指摘された検討課題のいくつかについて、研究を進めていった。

まずは、思春期分野において指摘された指標見直しに関する研究である。この研究は、2つの大規模調査から構成された。一つは、慎重な性行動に寄与する態度等の因子を把握するための全国調査である。調査協力の得られた高校に在籍する3年生2234名に対して調査票を配布し、そのうち2019名から調査票を回収した。慎重な性行動（性交経験の有無およびコンドーム使用状況、性交相手数、等からなる）および、性交経験の有無に有意に関連する態度項目が複数把握された。その一方、知識項目については、有意な関連はみられなかった。この調査研究を通じて、教育現場で扱うことが可能な態度項目2つを、思春期分野の新たな指標案として提示することができた。それらは、「C3. 性行動は相手の身体や心を傷つける可能性があると思いますか」「C4. 自分の身体を大切にしていますか」であった。

次に、これら指標案に関するベースライン値把握のための全国多段抽出調査（高校生）をおこなった。その結果のベースライン値は、「C3. 性行動は相手の身体や心を傷つける可能性があると思う」男子：63.9%，女性：68.6%、「C4. 自分の身体を大切にしている」男子：66.6%，女子：73.9%となった。

これら2つの調査研究により、健やか親子21が2010年までに推進すべき新たな指標について、エビデンスを提出することができた。今後、新しい指標についても、そのベースライン値から増加傾向に向かわせるための実践戦略に取り組む必要性が得られた。

また、上記全国多段階抽出調査において、高校生を対象に、生活習慣および食に関する状況等を、同時に握した。思春期の健康課題については、多角的に総合的に対策を構築していく必要があり、その際に必要な学術資料を提出することができた。

妊娠・出産分野からは、大きな問題となっている喫煙の問題と、お産の満足度について、調査研究をおこなった。

喫煙については、妊娠を契機とした禁煙、産後の禁煙継続・禁煙挫折、それらに関与している因子等を、全国各地の保健センターの協力を得てまとめた。

お産満足度に関しては、健やか親子21中間評価において、「助産師の指導・対応」が影響しているということが明らかになっていたが（山縣班研究報告書）、今回は、この「助産師の指導・対応」を細分化し、その中でもどの細目が、お産満足度に影響を有しているのかについて、解析した。

これらの研究から、臨床・現場において、いくつかの改善・探求すべき点が明らかになった。今後はこれらの点を向上させていくために、現場においてどのような実践が必要になっていくのかを、その有効性の検証と共に、モデルを構築していく予定である。

「健やか親子 21」＜思春期の保健対策の強化と健康教育の推進＞ における指標の見直しに関する研究

樋口 善之	福岡県立大学看護学部
仁木雪子	弘前学院大学
笠井直美	新潟大学
丸岡里香	北翔大学
加藤千恵子	名寄市立大学
小林八重子	札幌市立山鼻中学校
佛圓和子	広島県立熊野高校
光本朱實	高知県思春期相談センター
濱 龍彦	福岡県立鞍手龍徳高校
米光真由美	西日本工業大学
内田美智子	内田産婦人科医院
渡辺多恵子	常総市保健センター
鈴木 茜	市原市保健センター
山田七重	山梨大学医学部社会学講座
松浦 賢長	福岡県立大学看護学部
山縣 然太朗	山梨大学大学院医学工学総合研究部

本研究は、＜思春期の保健対策の強化と健康教育の推進＞の指標のうち、「健やか親子 21」中間評価において、指標の見直しが必要であると指摘された 2 つの指標「避妊方法を正確に知っている 18 歳の割合」「性感染症を正確に知っている割合」について検討すると共に、これらに代わる新しい指標の検討を行なうことを目的とした調査を行なった。調査には、全国の 15 の高等学校が参加し、高校 3 年生 1986 名から有効な回答を得た。指標の有効性について検討する際には、“実際の性行動に結びついているか”を視点として用い、得られたデータを分析した結果、従来の 2 つの指標の有効性は支持されなかった。従来の指標の代替案として、「性行動による性感染症等の身体的影響等について知識のある高校生の割合」に関する 9 項目について、その有効性を検討した結果、「性行動は相手の体や心を傷つける可能性があると思う」「自分の身体を大切にしている」は、実際の性行動との有意な関連が確認された。

A. 研究目的

本研究は、＜思春期の保健対策の強化と健康教育の推進＞における指標として、検討が必要であると指摘された 2 つの指標：「避妊方法を正確に知っている 18 歳の割合」「性感染症を正確に知っている高校生の割合」について、その有効性及び妥当性を検討することを目的とした。また、これらに代わる新しい指標の開発のための基礎資料を提供することを目的とした。

当該領域における指標についての評価を行なう場合には、どのような知識・意識が実際の

性行動に結びついているのかについて検討することが重要である。本研究において検討する 2 つの指標：「避妊方法を正確に知っている 18 歳の割合」「性感染症を正確に知っている高校生の割合」は、ともに、「避妊法や疾患名の名称を選択させる方法」によって得られたデータである。指標として有効性および妥当性について検討する場合、「行動に結びつく知識」という観点が重要である。

「健やか親子 21」中間評価報告書において、上記の 2 つの指標は、「今後引き続き検討が必

要な指標」として指摘されている。平成 19 年 3 月の「健やか親子 21」の指標に関する研究会（座長：山縣然太朗）において、これらの 2 つの指標の代替案として、指標名を「性行動による性感染症等の身体的影響等について知識のある高校生の割合」とし、性行動の身体的影響等についての知識・意識に関する複数の質問を行ない、総合的に判断することが提案された。本研究では、同研究会において提案された代替案の内容について検討した。

B. 研究方法

調査対象

高校 3 年生 2234 名を調査対象とした。調査対象とする高校の選考には、所在地域、設置主体（国公立の別）、種別（普通科、専門学科の別）を考慮した。協力の得られた 15 校を調査対象校とした。

所在地の内訳は、次の通りである。北海道；1 校、東北；2 校、関東；2 校、甲信越・北陸；3 校、東海；1 校、近畿；1 校、中国；1 校四国；1 校、九州；3 校。

設置主体、学校種別の内訳は、次の通りである。公立普通科；7 校（公立女子高校を含む）、公立専門学科；4 校、私立学校；4 校

調査方法

協力の得られた各学校に調査票を郵送し、各学校単位において、無記名の自記式質問紙調査を実施した。調査票の回収にあたっては、テープによる封が可能な回収用の封筒を調査票とあわせて配布し、調査票記入後、記入者自身が封をするよう依頼した。調査票は、学校単位で回収した。なお、調査への参加にあたっては、調査票表紙に、調査の目的、調査責任者の連絡先を記し、1) 得られた情報により、個人を特定することはない、2) 調査委への参加は自由であり、不参加、未記入による不利益は生じないこと、を明記した。

調査項目の選定にあたって、実際の性行動や性行動に関連する調査項目は「北九州市における性感染症関連知識・行動・意識調査」（主任研究者：松浦賢長、2007）において用いられた調査票をベースとした。また、“「健やか親子 21」指標の見直し等について（平成 19 年 3 月）”

において指摘された＜課題 1 思春期の保健対策の強化と健康教育の推進＞における「避妊方法を正確に知っている 18 歳の割合」「性感染症を正確に知っている高校生の割合」に着目し、次の項目群を設定した（実際に用いた調査票は資料 1 を参照）。

- A) 基本的属性
- B) 性に関する相談者等について
- C) 友人や異性との交際について
- D) 性に関する知識について
- E) 性の問題に対する危機意識について
- F) 性行動の実際と態度について

従来の指標「性に関する知識」は、D の項目群に対応している。また、代替案として提案された、「性行動による性感染症等の身体的影響等について知識のある高校生の割合」に関連する項目は、C の項目群に対応している。C の項目群の具体的な内容は、「健やか親子 21」の指標に関する研究会において提案された以下の質問内容：「性行動によって、妊娠する可能性があることを知っていますか？」「性行動によって、性感染症などの病気に感染する可能性があることを知っていますか？」「性行動は相手の心や体を傷つける可能性があると思いますか？」「自分の身体を大切にしていますか？」「異性、友人を尊重することが大切だと思いますか？」「異性、友人とのつきあいの中で、お互いにきちんと話し合うことが大切だと思いますか？」等をベースとした。この調査は、2007 年 6 月～7 月に実施された。

分析対象

調査協力の得られた高校に在籍する 3 年生 2234 名に対して調査票を配布し、そのうち 2019 名から調査票を回収した。回収したサンプルのうち、無効回答を除く、1986 名のサンプルのデータを分析対象とした。本調査における有効回答率は 88.9%であった。分析対象における性別の割合は、男子 1059 名（53.3%）、女子 927 名（46.7%）であった。平均年齢は、17.3 歳（標準偏差 0.47）であった。

C. 結果

「基本的属性」

男子の平均年齢は 17.3 歳（標準偏差：0.48）、

女子の平均年齢は 17.3 歳（標準偏差：0.46）であった。本調査の回答者における男女間の年齢について、t 検定により、その平均値を比較したところ、有意差はみられなかった。

「性に関する相談者等について」

この設問において、「1. 性感染症に関する情報をどのような方法で知るか」「2. 性に関する悩みや不安について相談できる人・場があるか」についての情報を得た。

その結果、「1. 性感染症に関する情報をどのような方法で知るか」について、「情報はほとんど得ていない」と回答した者は、全体の 10.0%であった。その割合は、男性では 11.4%、女性では 8.4%であった。 χ^2 乗検定の結果、性別と「情報はほとんど得ていない」との間に有意な差がみられた ($p < .05$)。また、性感染症に関する具体的な情報源については、選択肢の中から複数選択により、回答を求めた。その結果、男子では、「学校」616 名 (58.2%)、「同性の友人」363 名 (34.3%)、「テレビ」327 名 (30.9%) という回答が多くみられた。女子では、「学校」579 名 (62.5%)、「テレビ」283 名 (30.5%)、「同性の友人」247 名 (26.6%) であった。

「2. 性に関する悩みや不安について相談できる人・場があるか」については、選択肢の中から“最も抵抗感の低い項目”を 1 つ選択することを求めた。その結果、男子では、「同性の友人」536 名 (56.3%) が最も多く、次いで「相談できる人・場所がない」263 名 (27.6%) であった。女子においても男子と同様に、最も多く見られた回答は「同性の友人」540 名 (64.9%)、ついで「相談できる人・場所がない」132 名 (15.9%) であった。女子は、男子と比較して「親」と回答する者が多くみられた (男子 4.4%、女子 10.1%)。また「医療機関」と回答した割合は、女子よりも、男子において高かった (男子 3.2%、女子 1.6%)。

「友人や異性との交際について」

この項目群に含まれる 9 項目は、＜課題 1 思春期の保健対策の強化と健康教育の推進＞における新たな指標の候補となる項目群である。

「C1. 交際相手や友人を尊重することは、大切なことだと思いますか」という設問に対して、“大切なことだと思います、いつも尊重している”と回答した割合は、71.9%。“大切なことだとは思いますが、現実には尊重できないことが多い”と回答した割合は、24.6%，“それほど大切なことではないと思う”と回答した割合は、2.0%であった。分析サンプルにおいて、31 名 (1.6%) は無回答であった。この設問と性交経験の有無とのクロス集計表を表 1 に示した。このクロス集計表における χ^2 乗検定の結果は、5%水準で有意であった。“大切なことだと思います、いつも尊重している”と回答した者における「性交経験の割合」は 35.0%，“現実には尊重できないことが多い”では 28.6%，“それほど大切なことではないと思う”では 27.8%であった。

「C2. 交際相手や友人とのつきあいの中で、互いにきちんと話し合うことが大切だと思いますか」という設問に対して、“大切なことだと思います、いつも話し合うようにしている”と回答した割合は 62.6%，“大切なことだとは思いますが、現実には話し合いができないことが多い”と回答した割合は 33.3%，“それほど大切なことではないと思う”と回答した割合は 2.4%であった。分析サンプルにおいて、34 名 (1.7%) は無回答であった。この設問と性交経験の有無とのクロス集計表を表 2 に示した。このクロス集計表における χ^2 乗検定の結果は、0.1%水準で有意であった。“いつも話し合うようにしている”と回答した者における「性交経験の割合」は 37.2%，“現実には話し合いができないことが多い”では 26.1%，“それほど大切ではないと思う”では 29.5%であった。

「C3. 性行動は相手の身体や心を傷つける可能性があると思いますか」という設問に対して、“可能性はあると思うが、特殊な場合だと思う”と回答した割合は 35.2%，“すべての場合ではないが、傷つける可能性は低くないと思う”と回答した割合は、56.5%，“かなりの確率で傷つけてしまうことがあると思う”と回答した割合は、6.4%であった。分析サンプルにおいて、37 名 (1.9%) は無回答であった。この設問と性交経験の有無とのクロス集計表を表 3 に示した。このクロス集計表における χ^2

乗検定の結果は、0.1%水準で有意であった。
“可能性はあるが、特殊な場合だと思う”と回答した者における「性交経験の割合」は41.2%，“全ての場合ではないが、傷つける可能性は低いと思う”では30.3%，“かなりの確率で傷つけてしまうことがあると思う”では18.3%であった。

「C4. 自分の身体を大切にしていますか」という設問に対して、“いつも大切にしている”と回答した割合は、70.8%，“傷つけてしまうことがたまにある”と回答した割合は、23.3%，“よく傷つけてしまう”と回答した割合は、3.8%であった。分析サンプルにおいて、40名（2.0%）は無回答であった。この設問と性交経験の有無とのクロス集計表を表4に示した。このクロス集計表における χ^2 乗検定の結果は、0.1%水準で有意であった。“いつも大切にしている”と回答した者における「性交経験の割合」は29.9%，“傷つけてしまうことがたまにある”では41.8%，“よく傷つけてしまう”では44.8%であった。

「C5. 交際相手や友人の身体を大切にすることはとても重要なことだと思いますか」という設問に対して“とても重要なことだと思います”と回答した割合は、81.3%，“とても重要なことだと思うが、現実にはなかなか難しい”と回答した割合は、14.9%，“それほど重要なことではないと思う”と回答した割合は、1.3%であった。分析サンプルにおいて、50名（2.5%）は無回答であった。この設問と性交経験の有無とのクロス集計表を表5に示した。このクロス集計表における χ^2 乗検定の結果は、5%水準では有意ではなかった。“とても重要なことだと思います”と回答した者における「性交経験の割合」は34.4%，“とても重要なことだと思うが、現実にはなかなか難しい”では29.6%，“それほど重要なことではないと思う”では28.0%であった。

「C6. 交際相手や友人との付き合いには、確固たる“けじめ”が大切だと思いますか」という設問に対して、“とても大切なことだと思います”と回答した割合は、56.9%，“大切なことだと思うが、現実にはなかなか難

しい”と回答した割合は、37.9%，“いまどき、けじめはそれほど大切なことではないと思う”と回答した割合は、2.8%であった。分析サンプルにおいて、48名（2.4%）は無回答であった。この設問と性交経験の有無とのクロス集計表を表6に示した。このクロス集計表における χ^2 乗検定の結果は、5%水準で有意であった。“とても大切なことだと思います”と回答した者における「性交経験の割合」は31.1%，“大切なことだと思うが、現実にはなかなか難しい”では36.2%，“いまどき、けじめはそれほど大切ではないと思う”では42.3%であった。

「C7. 異性との交際には、周囲の目が気になると思いますか」という設問に対して“とてもそう思う”と回答した割合は、30.8%，“あまりそう思わない”と回答した割合は、51.7%，“まったくそうは思わない”と回答した割合は、15.8%であった。分析サンプルにおいて、34名（1.7%）は無回答であった。この設問と性交経験の有無とのクロス集計表を表7に示した。このクロス集計表における χ^2 乗検定の結果は、0.1%水準で有意であった。“とてもそう思う”と回答した者における「性交経験の割合」は22.4%，“あまりそう思わない”では31.5%，“全くそう思わない”では60.6%であった。

「C8. 異性との交際には、親の目が気になると思いますか」という設問に対して、“とてもそう思う”と回答した割合は、32.6%，“あまりそう思わない”と回答した割合は、47.4%，“まったくそうは思わない”と回答した割合は、18.3%であった。分析サンプルにおいて、35名（1.8%）は無回答であった。この設問と性交経験の有無とのクロス集計表を表8に示した。このクロス集計表における χ^2 乗検定の結果は、0.1%水準で有意であった。“とてもそう思う”と回答した者における「性交経験の割合」は29.5%，“あまりそう思わない”では29.4%，“全くそう思わない”では50.7%であった。

「C9. 友人や異性との交際においては、慎重に行動するほうですか」という設問に対して、“慎重に行動するほうだ”と回答した割合は、

56.4%，“あまり慎重に行動するほうではない”と回答した割合は、38.0%，“まったく慎重ではないと思っている”と回答した割合は、3.6%であった。分析サンプルにおいて、40名（2.0%）は無回答であった。この設問と性交経験の有無とのクロス集計表を表9に示した。このクロス集計表における χ^2 乗検定の結果は、0.1%水準で有意であった。“とてもそう思う”と回答した者における「性交経験の割合」は26.5%，“あまりそう思わない”では42.6%，“全くそう思わない”では45.7%であった。

これらの9項目と、実際の性行動との関連について検討するため、従属変数を「性交経験の有無」、独立変数をこれら9項目としたカテゴリカル回帰分析を実施した。その結果、全ての項目の標準化係数は5%水準で有意であった。性交経験の有無を予測するモデルにおいて最も寄与率が大きい変数は、「C7 異性との交際には、周囲の目が気になると感じますか」、ついで「C9 友人や異性との交際においては、慎重に行動するほうですか」、 「C4 自分の身体を大切にしていますか」、 「C3 性行動は相手の体や心を傷つける可能性があると思いますか」であった。これらの項目は、思春期の性行動における指標として有効であると考えられる。18歳における性行動の指標として、「性行動や異性との交際について慎重な態度を示す」あるいは、「相手や自分の身体を思いやる、大切なこと・尊重すべきことである」と考えることが重要であることが示された。

「性に関する知識について」

この項目群に含まれる5項目は、性に関する知識に関するものである。5つの「性に関する記述」について、「正しい」「正しくない」「わからない」の3つの選択肢を用いて回答を求めた。

「D1. 性行動によって、病気に感染する場合がある」という設問に対して、「正しい」と回答した割合は、94.2%、「正しくない」と回答した割合は、0.9%、「分からない」と回答した割合は、3.5%であった。分析サンプルにおいて、28名（1.4%）は無回答であった。正答は「正しい」である。正答率は、94.2%であった。この設問と性交経験の有無とのクロス集計表

を表10に示した。このクロス集計表における χ^2 乗検定の結果は、0.5%水準で有意であった。性交経験のある609名のうち、「正しい」と回答した者は595名（97.7%）、性交経験のない1221名のうち、「正しい」と回答した者は1159名（94.9%）であった。なお、この検定において、性交経験についての設問に対して無回答であったものは、分析から除外された。

「D2. 性行動によって、妊娠する場合がある」という設問に対して、「正しい」と回答した割合は、95.5%、「正しくない」と回答した割合は、0.9%、「分からない」と回答した割合は、2.1%であった。分析サンプルにおいて、31名（1.6%）は無回答であった。正答は「正しい」である。正答率は95.5%であった。この設問と性交経験の有無とのクロス集計表を表11に示した。このクロス集計表における χ^2 乗検定の結果は、1%水準で有意であった。性交経験のある608名のうち、「正しい」と回答した者は600名（98.7%）、性交経験のない1219名のうち、「正しい」と回答した者は1175名（96.4%）であった。なお、この検定において、性交経験についての設問に対して無回答であったものは、分析から除外された。

「D3. ピルは、性感染症の予防に有効である」という設問に対して、「正しい」と回答した割合は、25.8%、「正しくない」と回答した割合は、51.8%、「分からない」と回答した割合は、20.7%であった。分析サンプルにおいて、33名（1.7%）は無回答であった。正答は「正しくない」である。正答率は51.8%であった。この設問と性交経験の有無とのクロス集計表を表12に示した。このクロス集計表における χ^2 乗検定の結果は、0.1%水準で有意であった。性交経験のある605名のうち、「正しくない」と回答した者は379名（62.6%）、性交経験のない1221名のうち、「正しくない」と回答した者は586名（48.0%）であった。なお、この検定において、性交経験についての設問に対して無回答であったものは、分析から除外された。

「D4. コンドームの使用法によっては、性感染症の予防にならないことがある」という設問に対して、「正しい」と回答した割合は、69.6%、

「正しくない」と回答した割合は、11.5%、「分からない」と回答した割合は、17.3%であった。分析サンプルにおいて、33名（1.7%）は無回答であった。正答は「正しい」である。正答率は69.6%であった。この設問と性交経験の有無とのクロス集計表を表13に示した。このクロス集計表における χ^2 乗検定の結果は、0.5%水準で有意であった。性交経験のある606名のうち、「正しい」と回答した者は458名（75.6%）、性交経験のない1219名のうち、「正しい」と回答した者は831名（68.2%）であった。なお、この検定において、性交経験についての設問に対して無回答であったものは、分析から除外された。

「D5. 性感染症を予防するための最も効果的な方法は、“No Sex（性行動をしないこと）”である」という設問に対して、「正しい」と回答した割合は、63.3%、「正しくない」と回答した割合は、13.2%、「分からない」と回答した割合は、21.9%であった。分析サンプルにおいて、33名（1.7%）は無回答であった。正答は「正しい」である。この設問と性交経験の有無とのクロス集計表を表14に示した。このクロス集計表における χ^2 乗検定の結果は、有意ではなかった。性交経験のある608名のうち、「正しい」と回答した者は401名（66.0%）、性交経験のない1218名のうち、「正しい」と回答した者は783名（64.3%）であった。なお、この検定において、性交経験についての設問に対して無回答であったものは、分析から除外された。

「性の問題に対する危機意識」

この設問群は、性の問題に対する危機意識に関する項目である。設問文に対して、「そう思う」から「そう思わない」までの4段階で回答を求めた。設問の内容によっては、「該当しない」を選択肢に加えた。

「E1. 将来、自分が性感染症に感染することがあると思いますか」という設問に対して、「そう思う」と回答した割合は、5.9%、「そう思わない」と回答した割合は、27.4%であった。分析サンプルにおいて、85名（4.3%）は無回答であった。この設問と「性交経験の有無」との関連について、 χ^2 乗検定により検討した。検

定結果は、有意であった（ $p < .001$ ）。性交経験のある606名のうち、「そう思う」と回答した者は63名（10.4%）、「ややそう思う」と回答した者は125名（20.6%）であった。性交経験のない1180名のうち、「そう思う」と回答した者は47名（4.0%）、「ややそう思う」と回答した者は198名（16.8%）であった。なお、この検定において、性交経験についての設問に対して無回答であったものは、分析から除外された。

「E2. 現在、自分が性感染症に感染しているかもしれないと思うことがありますか」という設問に対して「そう思う」と回答した割合は、2.4%、「そう思わない」と回答した割合は、75.3%であった。分析サンプルにおいて、96名（4.8%）は無回答であった。この設問と「性交経験の有無」との関連について、 χ^2 乗検定により検討した。検定結果は、有意であった（ $p < .001$ ）。性交経験のある605名のうち、「そう思う」と回答した者は26名（4.3%）、「ややそう思う」と回答した者は44名（7.3%）であった。性交経験のない1167名のうち、「そう思う」と回答した者は19名（1.6%）、「ややそう思う」と回答した者は33名（2.8%）であった。なお、この検定において、性交経験についての設問に対して無回答であったものは、分析から除外された。

「E3. 現在、自分の性行動の相手が性感染症に感染しているかもしれないと思うことがありますか」という設問に対して「そう思う」と回答した割合は、2.1%、「そう思わない」と回答した割合は、36.0%、「該当しない」と回答した割合は、46.9%であった。分析サンプルにおいて、54名（2.7%）は無回答であった。

「E4. 自分が原因でだれかに性感染症を感染させたかもしれないと思うことがありますか」という設問に対して「そう思う」と回答した割合は、2.0%、「そう思わない」と回答した割合は、40.6%、「該当しない」と回答した割合は、46.3%であった。分析サンプルにおいて、54名（2.7%）は無回答であった。

「E5. 自分の性行動の相手が原因で自分が性感染症に感染したかもしれないと思うことがありますか」という設問に対して「そう思う」と回答した割合は、2.4%、「そう思わない」と

回答した割合は、75.3%、「該当しない」と回答した割合は、47.0%であった。分析サンプルにおいて、96名(4.8%)は無回答であった。

「E6. 自分の性行動の相手の元カレ(元カノ)が性感染症に感染していたかもしれないと思うことがありますか」という設問に対して「そう思う」と回答した割合は、2.7%、「そう思わない」と回答した割合は、37.4%、「該当しない」と回答した割合は、47.3%であった。分析サンプルにおいて、52名(2.6%)は無回答であった。

「E7. 自分あるいは性行動の相手が妊娠したかもしれないと思ったことがありますか」という設問に対して「そう思う」と回答した割合は、5.2%、「そう思わない」と回答した割合は、31.4%、「該当しない」と回答した割合は、48.1%であった。分析サンプルにおいて、53名(2.7%)は無回答であった。

「性行動の実際と態度について」

本分析対象における性交経験割合は、30.7%であった(無回答7.7%)。性別との関連はみられなかった(男子32.1%、女子34.6%、 χ^2 乗検定, n. s.)。なお、性別の性交経験割合においては、性交経験に関する設問に対して無回答であった者を除いている。性別の「初交時の年齢」は、男子(n=296)において 15.7 ± 1.12 、女子(n=268)において 15.6 ± 1.17 であった。性差はみられなかった(t-test, n. s.)。「初交時の相手の年齢」は、男子(n=298)において 16.2 ± 3.12 、女子(n=264)において 17.0 ± 3.53 であった。性差は有意であった(t-test, $p < .05$)。この1ヶ月間での性交回数は、男子(n=298)において 3.6 ± 9.26 、女子(n=253)において 2.32 ± 5.97 であった。性差はみられなかった(t-test, n. s.)。過去6ヶ月間の性交人数は、男子(n=304)において 2.2 ± 9.32 、女子(n=274)において 1.2 ± 1.07 であった。性差はみられなかった(t-test, n. s.)。また、この設問において「0人」と回答した者は男子24.0%、女子16.4%であった。

「過去6ヶ月間におけるコンドームの使用状況」に関して、「必ず(100%)」と回答した割合は、48.0%、「ほとんど(80%)」と回答した割合は、23.9%、「時々(50%)」と回答した割

合は、9.1%、「あまり(25%)」と回答した割合は、4.6%、「全く(0%)」と回答した割合は、10.0%であった。なお、この設問は、過去6ヶ月間に性交したと回答した者のみを対象とした(n=460)。また、この設問に対し、20名(4.3%)は無回答であった。コンドームを使用した理由について4つの選択肢から複数選択方式により、回答を求めたところ、「妊娠しないように」69.3%、「エイズ、性感染症予防のため」26.1%、「相手が希望したから」5.7%、「なんとなく」4.1%であった(各項目の割合は、コンドームを使用した(「必ず」-「あまり」)と回答した394名に基づく)。一方のコンドームを使用しなかった理由について6つの選択肢から複数選択方式により、回答を求めたところ、「妊娠してもよかったから」19.6%、「性感染症の危険はないと思ったから」2.2%、「相手が断ったから」4.3%、「コンドームはお金がかかるから」15.2%、「コンドームが嫌いだから」41.3%、「なんとなく」41.3%という結果であった(各項目の割合は、コンドームを使用しなかったと回答した46名に基づく)。

以下の4項目は、「性行動に対する態度」に関する項目として、性交経験の有無に関わらず、回答を求めた。

「F4. あなたは中学生が性行動をすることについてどう思いますか」という設問に対して、“性行動は、責任のとれる立場になってからするべきだ”と回答した割合は、36.4%、“妊娠や病気が学業に与えるその後の影響を考えると、しないほうがよい”と回答した割合は、17.8%、“中学生が性行動をするのは、時代の流れであるので仕方がない”と回答した割合は、8.9%、“性行動をするかしないかは、中学生においても個人の自由である”と回答した割合は、30.0%であった。分析サンプルにおいて、138名(6.9%)は無回答であった。

「F5. あなたは高校生が性行動をすることについてどう思いますか」という設問に対して、“性行動は、責任のとれる立場になってからするべきだ”と回答した割合は、25.3%、“妊娠や病気が学業に与えるその後の影響を考えると、しないほうがよい”と回答した割合は、15.1%、“高校生が性行動をするのは、時代の

流れであるので仕方がない”と回答した割合は、12.0%，“性行動をするかしないかは、高校生においても個人の自由である”と回答した割合は、40.0%であった。分析サンプルにおいて、150名（7.6%）は無回答であった。

「F6. あなた自身の性行動についてどう思いますか」という設問に対して，“性行動は、責任のとれる立場になってからするべきであるので、今はしない”と回答した割合は、33.3%，“妊娠や病気が学業に与えるその後の影響を考えると、今はしない”と回答した割合は、13.5%，“高校生が性行動をするのは、時代の流れであるので、今しても構わない”と回答した割合は、9.9%，“性行動をするかしないかは、わたしの自由であるので、今しても構わない”と回答した割合は34.1%であった。分析サンプルにおいて、183名（9.2%）は無回答であった。

「F7. あなたは性行動をすることに、関心がありますか」という設問に対して，“とても関心がある”と回答した割合は、14.8%，“やや関心がある”と回答した割合は、31.3%，“あまり関心がない”と回答した割合は、32.4%，“まったく関心がない”と回答した割合は、7.4%，“嫌悪さえおぼえる”と回答した割合は、4.0%であった。分析サンプルにおいて、202名（10.2%）は無回答であった。

D. 考察

本研究では、＜思春期の保健対策の強化と健康教育の推進＞における指標として、検討が必要であると指摘された2つの指標：「避妊方法を正確に知っている18歳の割合」「性感染症を正確に知っている高校生の割合」について、その有効性及び妥当性を検討することおよび、これらに代わる新しい指標の開発のための基礎資料を提供することを目的とした調査を行った。

「性に関する知識」を指標とする場合，“正確な知識を有していることと性行動を控えることは正の関連がある”ことが前提となる。本研究では「性に関する知識」に関する5つの質問項目（D項目群：「D1 性行動によって、病気に感染する場合がある」「D2 性行動によって、妊娠する場合がある」「D3 ピルは、性感染症の

予防に有効である」「D4 コンドームの使用方法によっては、性感染症の予防にならないことがある」「D5 性感染症を予防するための最も効果的な方法は、“No sex（性行動をしないこと）”である」）を用い、実際の性行動（これまでに性交をしたことがあるか、どうか）との関連について検討した。その結果、性交経験のある者は、性交経験のない者と比較して、正答の割合が高いことが示された。とくに「D3 ピルは、性感染症の予防に有効である」という設問に対して「正しくない」と回答した割合は、性交経験のある者では62.6%、性交経験のない者では48.0%と14ポイントの差がみられた。また、本研究の結果から、性交経験のない者は、性交経験のある者と比較して、「わからない」と回答する割合が高いことが示唆された。これらの結果は、“性（性感染症）に関する正しい知識があることと性行動を控えることとは正の関連がある”という「知識ベース」の指標モデルの前提を支持しない。本研究の結果が示唆していることは、“性行動を活発に行なう者ほど、性（性感染症）に関する正しい知識を有している”ということであると考えられる。

本研究では、従来の「性に関する正しい知識」ベースの指標に代わる「性行動による性感染症等の身体的影響等について知識のある高校生の割合」として9つの質問項目（C項目群：C1 交際相手や友人を尊重することは大切なことだと思いますか」「C2 交際相手や友人とのつきあいの中で、互いにきちんと話し合うことが大切だと思いますか」「C3 性行動は相手の体や心を傷つける可能性があると思いますか」「C4 自分の身体を大切にしていますか」「C5 交際相手や友人の身体を大切にすることはとても重要なことだと思いますか」「C6 交際相手や友人との付き合いには、確固たる“けじめ”が大切だと思いますか」「C7 異性との交際には、周囲の目が気になると思いますか」「C8 異性との交際には、親の目が気になると思いますか」「C9 友人や異性との交際においては、慎重に行動するほうですか」）を用い、実際の性行動との関連について検討した。カテゴリカル回帰分析の結果、9項目のうち、4つの項目（C3, C4, C7, C9）において、実際の性行動との関連があるこ

とが示された。これらの4つの項目のうち、「思春期の保健対策の強化と健康教育の推進」という課題へ取り組み際の指標として考えた場合、「C3 性行動は相手の体や心を傷つける可能性があると思いますか」および「C4 自分の身体を大切にしていますか」の2つの項目が指標として適切であると考えられる。 χ^2 乗検定による単変量解析において、これらの2項目と実際の性行動との関連は有意であった。「C3 性行動は相手の体や心を傷つける可能性があると思いますか」という設問に対して、“かなりの確率で傷つけてしまうと思う”と回答した者において、その性交経験割合は18.3%であり、また、“全ての場合ではないが、傷つける可能性は低くないと思う”と回答した者において、その性交経験割合は30.3%であった。一方、この設問に対して、「可能性はあると思うが、特殊な場合だと思う」と回答した者における性交経験割合は、41.2%であった。これらのことから、「性行動は相手の体や心を傷つける可能性があると思う」ことと実際の性行動とは、関連しており、実際の性行動に結びつく指標として「性行動は相手の体や心を傷つける可能性があると思う」は有効であると考えられる。また、同様に「C4 自分の身体を大切にしていますか」という設問に対して“いつも大切にしている”と回答した者における性交経験割合は29.9%であるのに対して、“傷つけてしまうことがたまにある”と回答した者における性交経験割合は41.8%、“よく傷つけてしまう”と回答した者における性交経験割合は44.8%であったことから、「自分の身体を大切にしている」は、

実際の性行動に結びついた指標として有効であると考えられる。

F. 結論

本研究の結果から、従来の指標「性に関する正しい知識」は、実際の性行動と結びついた指標としては、有効でないといえる。それに代わる新たな指標「性行動による性感染症等の身体的影響について知識のある高校生の割合」として、「性行動は相手の体や心を傷つける可能性があると思う」「自分の身体を大切にしている」を検討した結果、実際の性行動との有意な関連が確認されたことから、＜思春期の保健対策の強化と健康教育の推進＞における指標として活用することは有効であり、また妥当性があるといえる。

【参考文献】

- 1) 松浦賢長. (2007). 北九州市における性感染症関連知識・行動・意識調査報告書.
- 2) 「健やか親子 21」推進検討会. (2006). 中間評価報告書. <http://www.mhlw.go.jp/shingi/2006/03/s0316-4.html>
- 3) 「健やか親子」21の指標に関する研究会. (2007). 「健やか親子 21」指標の見直し等について. <http://www.mhlw.go.jp/shingi/2007/03/s0301-11.html>

表 1. C1 と性交経験の有無とのクロス集計表

		性交経験の有無		合計
		あり	なし	
c1	大切なことだと思い、いつも尊重している	度数	466	864
		行 の %	35.0%	65.0%
		列 の %	76.9%	71.1%
	大切なことだとは思いますが、現実には尊重できないことが多い	度数	130	325
		行 の %	28.6%	71.4%
		列 の %	21.5%	26.7%
	それほど大切なことではないと思う	度数	10	26
		行 の %	27.8%	72.2%
		列 の %	1.7%	2.1%
合計		度数	606	1215
		行 の %	33.3%	66.7%
		列 の %	100%	100%

表 2. C2 と性交経験の有無とのクロス集計表

		性交経験の有無		合計
		あり	なし	
c2	大切なことだと思い、いつも話し合うようにしている	度数	433	731
		行 の %	37.2%	62.8%
		列 の %	71.6%	60.3%
	大切なことだと思うが、現実には話し合いができないことが多い	度数	159	450
		行 の %	26.1%	73.9%
		列 の %	26.3%	37.1%
	それほど大切なことではないと思う	度数	13	31
		行 の %	29.5%	70.5%
		列 の %	2.1%	2.6%
合計		度数	605	1212
		行 の %	33.3%	66.7%
		列 の %	100%	100%

表 3. C3 と性交経験の有無とのクロス集計表

		性交経験の有無		合計	
		あり	なし		
c3	可能性はあると思うが、特殊な場合 だと思ふ	度数	268	383	651
		行 の %	41.2%	58.8%	100%
		列 の %	44.1%	31.6%	35.8%
	全ての場合ではないが、傷つける可 能性は低くないと思ふ	度数	318	730	1048
		行 の %	30.3%	69.7%	100%
		列 の %	52.3%	60.3%	57.6%
	かなりの確率で傷つけてしまうと思ふ	度数	22	98	120
		行 の %	18.3%	81.7%	100%
		列 の %	3.6%	8.1%	6.6%
合計	度数	608	1211	1819	
	行 の %	33.4%	66.6%	100%	
	列 の %	100%	100%	100%	

表 4. C4 と性交経験の有無とのクロス集計表

		性交経験の有無			
		あり	なし	合計	
c4	いつも大切にしている	度数	393	923	1316
		行 の %	29.9%	70.1%	100%
		列 の %	65.0%	76.1%	72.4%
	傷つけてしまうことがたまにある	度数	182	253	435
		行 の %	41.8%	58.2%	100%
		列 の %	30.1%	20.9%	23.9%
	よく傷つけてしまう	度数	30	37	67
		行 の %	44.8%	55.2%	100%
		列 の %	5.0%	3.1%	3.7%
合計	度数	605	1213	1818	
	行 の %	33.3%	66.7%	100%	
	列 の %	100%	100%	100%	

表 5. C5 と性交経験の有無とのクロス集計表

		性交経験の有無		合計
		あり	なし	
c5	とても重要なことだと思い、そうしている	度数	518	990
		行 の %	34.4%	65.6%
		列 の %	85.5%	82.4%
	とても重要なことだと思うが、現実にはなかなか難しい	度数	81	193
		行 の %	29.6%	70.4%
		列 の %	13.4%	16.1%
	それほど重要なことではないと思う	度数	7	18
		行 の %	28.0%	72.0%
		列 の %	1.2%	1.5%
合計		度数	606	1201
		行 の %	33.5%	66.5%
		列 の %	100%	100%

表 6. C6 と性交経験の有無とのクロス集計表

		性交経験の有無		合計
		あり	なし	
c6	とても大切なことだと思い、そうしている	度数	327	724
		行 の %	31.1%	68.9%
		列 の %	54.0%	60.0%
	とても大切なことだと思うが、現実にはなかなか難しい	度数	257	452
		行 の %	36.2%	63.8%
		列 の %	42.4%	37.5%
	いまどき、けじめはそれほど大切なことではないと思う	度数	22	30
		行 の %	42.3%	57.7%
		列 の %	3.6%	2.5%
合計		度数	606	1206
		行 の %	33.4%	66.6%
		列 の %	100%	100%

表 7. C7 と性交経験の有無とのクロス集計表

		性交経験の有無		合計
		あり	なし	
c7	とても思う	度数	126	563
		行 の %	22.4%	100%
		列 の %	20.7%	30.9%
	あまりそう思わない	度数	305	967
		行 の %	31.5%	100%
		列 の %	50.2%	53.1%
	まったくそうは思わない	度数	177	292
		行 の %	60.6%	100%
		列 の %	29.1%	16.0%
合計		度数	608	1822
		行 の %	33.4%	100%
		列 の %	100%	100%

表 8. C8 と性交経験の有無とのクロス集計表

		性交経験		合計
		あり	なし	
c8	とても思う	度数	175	594
		行 の %	29.5%	100%
		列 の %	28.8%	32.6%
	あまりそう思わない	度数	260	885
		行 の %	29.4%	100%
		列 の %	42.8%	48.6%
	まったくそうは思わない	度数	173	341
		行 の %	50.7%	100%
		列 の %	28.5%	18.7%
合計		度数	608	1820
		行 の %	33.4%	100%
		列 の %	100%	100%